

グループワークの目標と進め方

長岡技術科学大学 工学研究科 生物機能工学専攻 准教授

山本 麻希

鵜的フェーズ3に到達する、あるいは、県内のねぐら・コロニーの位置がわかり、1 漁協の管轄を超えて広域で個体群管理を実施していく段階となるとカワウ問題にかかわる様々な立場の人たちが話し合う場を持ち、カワウ対策を進めていくことが大切である。カワウはブラックバスと違い、日本の河川生態系の在来種であるため、その生存は生物多様性の観点からも保障されねばならない。一方で、カワウによる漁業被害が深刻なあまり、漁協の経営ができないというのも困ってしまう。そこで、私たちは、カワウが絶滅はしないけれど、彼らによる被害が容認できる程度に個体群を管理していく必要がある。

カワウの問題については、それぞれの人々の立場で管理に関する意見も大きく異なる。そこで鵜的フェーズ3では、このように意見の異なる利害関係者の合意形成を行い、カワウ問題を解決するため、実際に行動を起こしていく必要がある。皆が諦めて、妥協するのではなく、お互いの意見の違いを認めつつ、お互いが納得できる結論を導き出すことが大切である。その際に、感情的な話し合いよりも、社会学的手法に則ったワークショップ（WS）を通じて合意形成を行っていく方が効率的である。

鵜的WSというグループワークは社会学的手法を取り入れているため、話し合いにはルールが存在する。そのルールは、(1)ワークショップ中は個人的な、あるいは組織的な問題にこだわらない。(2)すべてのアイデアが有効である。(3)全員が参加する。というものである。ワークショップには様々な立場（漁協の人、行政担当者、野鳥の会など）の人が参加することが想定される。ワークショップを成功に導くには、その人の所属する組織や個人的問題は忘れ、すべての人が対等な参加者として扱うものとする。話し合いの途中で、「そんなことはできるはずない・・・。」等のネガティブな意見を出すことは禁止とする。すべての意見に対し、ポジティブに取り扱うこと。また、特定の人の意見だけが通ることが無いよう、必ず全員が話し合いに参加することを前提とする。

鵜的WSは、まず、話し合いの目的、目標、基本ルールを確認する。その後、WSの進行役、書記、タイムキーパーの役割を決めてもらう。その後、参加者の緊張をほぐすため、自己紹介とともに、このWSで達成したいことについて1～2分で紹介してもらう。次に、カワウ対策に必要な情報をまとめた地図作りをみんなで行う。具体的には、季節ごとの県内のねぐら・コロニーの位置、被害のある漁協の位置、被害のある魚種などを書き入れていく。つぎに、時間を決めて、地図から読み取れるカワウ被害に関する課題について、付箋を用いて書きだす。その後、各自が書いた付箋を発表しつつ、その内容をジャンルごとにまとめていく。最後に、民主的な手法を用いて、重要課題を3～4つに絞り込む。

その後、これらの重要課題を解決するために、必要な対策を考えていく。具体的には、誰がいつどのような予算で実施するか、すぐにできる対策か、それとも、長い時間をかけて取り組んでいく対策課を見極めつつ意見を出してもらう。特に、カワウの対策で重要な、個体群管理、被害防除、生息地管理の3つの観点から、様々な対策について案を出してもらう。最後に、出てきた対策案の中から最も効果が高い対策を選び、優先順位をつけていく。

鵜的WSはあくまでも今後のカワウ対策の道筋を考える話し合いである。この後、ここで決まった対策を実践して初めて被害対策に効果がでる。毎年実施した対策の効果を検証するデータをしっかりととりながら、関係者が対策の成功と失敗の情報を共有しつつ、鵜的フェーズ6を目指して、毎年カワウ対策の改善を行っていくことが重要である。